

中井正一のコミュニケーション論における「嘘言」と利潤機構

後 藤 嘉 宏*

Lies and Profit Organizations in the Communication Theory of Masakazu NAKAI

Yoshihiro Goto

中井正一（1900-52）の利潤機構への評価は二価的である。具体的にはその問題は商品としての情報媒体に対する評価の矛盾として現れる。

本稿はこの矛盾を、コンコードンス作り的な方法により解き明かそうとし、矛盾をどう統合すべきかを探った。

具体的には「委員会の論理」のコミュニケーションにおける嘘言の媒介の記述と『美学入門』のコプラの不在の議論等の再検討から、この矛盾を統合する枠組みを探った。

結論として矛盾の理由は以下のようになる。1つめの理由としては、商品としての情報媒体が媒体の商品としての「型」によって、情報を歪める点に中井は着目しつつ、情報技術の発展が我々の可能性を開くことにも着目した点を指摘する。理由の2つめとして、商品であることで複製可能と歪みの可能性が併せもたれ、多様な《異本》が作られる点が挙げられる。したがって商品性の欠点である歪みがかえって商品性の乗り越えの手段も与える。以上の点で、中井の矛盾は統合される。

The estimation for profit organizations by Masakazu NAKAI (1900-52) is ambivalent.

Some of papers of NAKAI take commercial information media as devils which oppress the individuality of human being. And others of his papers regard commercial information media as angels or blessings to us which enable us to enlarge our possibilities.

In this article we intend to find out the cause of these contradictions between his papers, and we seek to reconstruct the framework which integrate his papers. Concretely reexamining "the Logic of Committees (1936)" and the *Introduction to Aesthetic (1951)*, we get the framework which can resolve his contradictions.

The conclusion of this article is below. 1) One hand commercial information media have the patterns which oppress us and distort our communications, on the other hand, they open the door to our new sensation. 2) Because commercial information media have the possibilities of reproductions and the chances of distortion, they can bring various kinds of 'variant texts'. 3) Due to these two reasons, his contradictions can be resolved.

* 筑波大学図書館情報学系

Institute of Library and Information Science, University of Tsukuba

1. はじめに

本稿では、中井正一のコミュニケーション論を、情報媒体が商品であることの功罪を、彼がどう捉えたかという観点から論ずる。

中井のコミュニケーション論については、一定の研究史がある。鶴見俊輔が編集に加わった『講座・コミュニケーション』(研究社、1973年)では多くの巻に、広範な観点から中井のコミュニケーション論への言及がある。また特に中井のメディアム、ミッテル2つの媒介概念に着目して、彼のコミュニケーション論を研究する流れがあり、私もその流れのなかに自分の研究を位置づけている。その端緒を開いたのが、稻葉三千男である。稻葉は1969年に発表した論文「中井正一の“媒介”論」(『新聞学評論』18号)において、中井にはメディアムの媒介からミッテルの媒介への志向が一貫してあったと指摘する(稻葉 1969→1987 25)。他方、杉山光信は稻葉と同じ東京大学新聞研究所に助手として在職中に書いた、1975年の論文「言語・映画の理論と弁証法の問題——中井正一論の試み——」(『東京大学新聞研究所紀要』23号)において、中井に両方の志向があり、結局は「メディアムに支えられたミッテル」が目指されたといい(杉山 1975→1983 157-158), 稲葉を暗に批判する(杉山 1975→1983 147)。また鶴見俊輔の弟子筋に当たる木下長宏は、1995年の著書『中井正一——新しい「美学」の試み』(リプロポート)において、稻葉、杉山両者への言及はないものの、中井が結局はメディアム、ミッテル問題を解決し得なかつたと評する(木下 1995 174)。さらに本年4月、本学社会科学系から東京大学社会情報研究所に戻った北田暁大は、2000年発表の論文「《意味》への抗い——中井正一の映画＝メディア論をめぐって」(『マス・コミュニケーション研究』56号)において、稻葉の主張の延長上に(北田 2000 64), 自らの論を展開し、「超越的な理論によって諸個人が結びつくのではなく(Medium的媒介)」「Mittel的現実行動によって構成される集団に賭ける中井の知的態度」(北田 2000 68)を捉えていくこうしている。これらの研究以外、この問題に関しては、いくつかの拙稿があるのみである。

このメディアム、ミッテルについての中井自身のテキストは極めて錯綜している。

したがってその意味内容は充分に確定しがたい面もあるが、基本的にミッテルの媒介は、送り手と受け手とが対等な媒介であり、なおかつ媒介項がレンズのように透明に近い状態になる媒介である。したがって、そのようなミッテルの媒介の考察は、インターネットが発達し、

情報の送受信の双方向性が技術的可能性としては充分に整った現代の情報環境を的確に照射し得るものと考えられる。また情報機器がその存在を小さくしながら、体軀のなかから宇宙の果てまで写し出し、それらが透明な媒介項となりつつある現代の状況も、このミッテルの媒介の考察によって、より明らかになる。特にそのようなミッテルの媒介と、その対立概念であるところのメディアムの媒介との狭間で、晩年の中井の価値判断が揺れ動き、逡巡していただけに、これらの考察は、現代のコミュニケーション状況の光と影を考える上でも有意義であると思われる。

本稿は、以上のようなミッテルの媒介を可能にする、情報媒体、情報機器の商品性について中井がどう考えていてかを分析しようとするものである。

一般に、商品を作成し販売する者は、利益を目指し、売れ行きを考慮する。それは情報を主として売る商品、情報財に関しても同じである。しかし情報財は、技術革新の成果を情報媒体が取り込む結果、我々のものを見る視界を拡大し、ミクロな世界からマクロな世界まで見聞きができるようにするという意味で、感覚器官に閉じ込められた我々に、無限の可能性を与える。そして技術革新は、産業資本が商品開発するなかでなされる。

このように商品としての情報財は、我々のコミュニケーションを豊かにするが、歪める可能性もある点で、功罪相半ばする。私自身、後藤(1999a)で中井を離れてジャック・アタリに依拠してこの問題を考察したし、後藤(1999b)でも、中井や稻葉三千男の議論や今村仁司のメディア=貨幣論(今村 1994)を織り交ぜつつ、同様の考察を重ねてきた。

本稿は、中井正一のコミュニケーションの内在的な分析に、その議論の射程を自己限定しながら、中井に即してこの情報財の商品性の問題を論じたい。

中井は、映画など機械技術に媒介されたメディアを射程に入れた独自の美学を構築し、没後、一部のメディア論者たちから、注目された。また彼は戦前、京都大学周辺でファシズムに抵抗する人民戦線を組織した。そのため当人はマルクス主義に距離を保っていたとされるものの、友人にはマルクス主義者が多かった⁽¹⁾。したがって中井のなかには、映画を発展させる、情報媒体の技術的進展への肯定的見通しが、「利潤機構」への積極的把握となつて現れると同時に、「利潤機構」に対する否定的把握も併存する。

本稿では彼自身の類似したテキスト相互の矛盾や主張の相違を指摘し、それらの矛盾や相違の背景を探るコンコードанс作り目的な方法(後藤 2003)によって、この中

井の情報媒体に対する矛盾・相違を明確化させる。要するに、コンコーダンス作り的な方法とは、特定のキーワードの出現するテキストを中井の全集なり著作から網羅的にフォローして、それらの用語の使われ方、意味内容の共通する点と異なる点を炙り出するような方法である。つまり特定の用語について巻末索引のようなものを作つて、索引に出てきた箇所を全て読み込み、比較するような方法である。とはいっても、読解の過程では全てにフォローするものの、実際の研究の記述の段階で、それら全てに言及すると、紙幅の制限を越えることになるので、研究の記述の上では現実的には特定の用語の用法や前後の文脈をいくつか比較するという、通常の、思想史や文学史等での個人研究と大差はないこととなる。しかし比較された相互のテキスト及びそれらの文脈が異なっていたり、矛盾していたりすることを明確にし、その矛盾のよってきたる原因を探ることで、著者の理論や体系がより明らかになることが期待できる。本稿においてこの方法を適応する場合、そのことによって中井のテキスト相互の矛盾を、どのように彼自身が弁証法的に止揚しようとしていたかを、読みとることができると考えられる。

つまり別の論文のなかにある非常に似たテキストそれぞれで、商品としての情報媒体への評価が異なる。それら双方がともに彼の真意であるとすると、その矛盾の理由は何なのか。それらを統合する枠組みが他の彼の論文のテキストから用意できるのか。これらを探ることを本稿の目的としたい。

この情報媒体の商品化への二価的態度は中井理論を貫く矛盾である。そしてそのことは、中井が商品に対して、二価的な態度や評価を下していたというのみならず、その相違は、中井の眼からみた商品というものに内在する矛盾であると思われ、そのような矛盾の止揚を彼がどう考えていたかも、コンコーダンス的な方法によって、証したい。

具体的には中井の商品性への言及は、彼の「嘘言」への考察と密接不可分である。後藤(2000b)、後藤(2000c)では、中井の「嘘言」の媒介の問題に触れ、それが出版論等での中井(後藤2000a、後藤2001)とは異質であると論じた。後藤(2000b)では、中井の「委員会の論理」の7と8の断絶の間に「嘘言」の媒介がある点を論じた。「委員会の論理」の7では個人の「確信」を肯定するのに、8ではそれを否定的に止揚し、「確信」を「主張」として集団化する点に注目した。本稿はそれらに加えて、この7と8との裂け目に、商品性の問題が絡む点を論じ、また中井が商品に二価的態度をもつ点をみていきたい。

2. 中井の「委員会の論理」における「嘘言」の媒介

この2.では、中井が1936年に書いた「委員会の論理」における「嘘言」の媒介に関する先行業績を相互の相違に着目して追おう。

「委員会の論理」は「嘘言」を肯定的に捉えた論文であるという指摘がなされている。

例えば後藤宏行(1965)は、次のように指摘する。

「入学試験や、採用試験の審査機構においても、選良をえらぶべき投票機構、マスコミを媒介とした商業機構などはいうにおよばず、出版活動内における思想行動すら、読者や購買者の《量的同意》を計算した、嘘言を媒介にしなければならなくなっている。こうした、経済機構や政治体制の準備する《嘘言の好餌》に、ただ眼を閉じてすぎるだけで済まされるのか。その辺の認識が中井にはあいまいである」(後藤(宏) 1965 280)。このように中井の「嘘言」への言及の曖昧さをまず後藤宏行は批判する。他方次のようにも指摘する。「中井は、《嘘言の構造》を、その社会機構や、政治体制に帰因せしめたが、主張のもつ量化傾向のなかにその胚芽を見出していたという点で、論理のもつ必然的な契機として、《嘘言》により積極的ないみづけを与えようとしていたのではなかろうか」(後藤(宏) 1965 280)。このように中井の「嘘言」への肯定を、後藤(宏)は「主張」のもつ量化傾向に関連づける。因みに中井において「主張」とは「確信」と対峙した概念である。自分の思うことは「確信」であり、それは質的な深まりを求める。他方「主張」はその「確信」を他者の賛同を求めて、量的に拡延したものであるという。

この後藤宏行の論稿は看過され、レファーされずに⁽²⁾、荒瀬豊(1978)で再び「嘘言」が中井の重要なテーマであると指摘される。荒瀬は、読者の投稿を中心にした新聞『土曜日』の受け手と送り手の双方向性の実験が、中井の「嘘言」の考え方を通じると指摘する。「コミュニケーションをする主体どうしがたがいに誠実なコミュニケーションを遂げようと努力し合うことによって」、「嘘言の生れる根源をふさぐ」(荒瀬 1978 149)という形で、荒瀬は「嘘言」の克服の観点から中井を論じる。そして「『嘘言』という問題を軸にして社会的コミュニケーションを考えることが現代哲学の中心課題であるという発想」(荒瀬 1978 149)は、中井の消費組合活動の時期に生じたと、指摘する。ただし荒瀬は後藤(宏)や後述する松岡、上野と「嘘言」が中井の重要な課題であるとみなす点では共

通するが、これら後3者と異なり、「嘘言」の肯定は強調せずに、「嘘言」の克服に力点を置く。

また針生一郎との対談で松岡正剛が「嘘言」に論及する。「その虚言構造を、一つのバネとして、あるいはフローしていくプロセスとして認めているということに関心を持ちましたね。虚言なき委員会はありえない」(針生・松岡 1982 135)。しかし松岡も、同一テーマで先行する後藤(宏)(1965)や荒瀬(1978)に言及しないし、この松岡の指摘に対談相手針生はなるほどと頷くのみで、具体的にそれ以上2人の討論が「嘘言」を巡り展開する訳ではない。

上野俊哉もこの問題に再びふれるが、後藤宏行、荒瀬、松岡に言及しない。「全ての社会的、コミュニケーション上の変容はこのずれ、嘘言による表現の転回をへているのである。・・・そしてこの嘘言こそが次の段階、つまりは『新しい空間』を発見するのだ」(上野 1997 225)。

ところが、松岡や上野のいい方は「委員会の論理」の半面の真実であるが、片面しか捉えない。なぜなら同論文の7から8にかけての「確信」と「主張」の峻別の箇所では、確かに「嘘言」の肯定に読みとり得る「委員会の論理」であるが、より後ろの部分では、明確に「嘘言」を否定するからである。つまり荒瀬の読みは「委員会の論理」の後半に力点があり、松岡や上野は前半に適合する。その点後述するように後藤宏行は的確に両面を捉えるが、その矛盾の解決は本稿と異なる。だがその前に中井自身のテキストを少し追おう。

「委員会の論理」の後ろの方の16における正射影の説明の箇所で、正射影すなわち基礎射影を妨げるものとして「嘘言」は登場する。「この提案は、多くの質問と説明と討議を経て決議にまでいたる。この間に、提案は多くの現実情勢の認識の歪曲より是正され、嘘言と虚偽より濾過されて、正射影をアップビルトするために努力せられるべきである。——しかし、現実の委員会はその反対である場合が多い」(中井 1936→中井 1981a 104)。「嘘言と虚偽より濾過されて」ということの表現にみられるように、「嘘言」は、コミュニケーションの1つの目的でもありさらに前提でもある、正射影を歪めるとされる。その点でこの「委員会の論理」の16のテキストは、荒瀬の読みの妥当性を裏づける。因みに中井の射影とは写すことであるが、レンズを通して単純にありのままを写すのは、上部射影である。しかし上部射影では、封建的な意識や商業資本により本来の姿が歪められる。したがって歪みを正し、るべき本当の姿を映し出すことが求められる。そこに正射影いいかえると基礎射影が得られるという(後藤 2000c)。

あるいは1934年の「模写論の美学的関連」において、「走ることのフォームにはまることが、その走り方の正射影を得ることである」(中井 1981a 11)という表現で、スポーツにおける正射影に関する言及がみられる。1930年の「スポーツの美的要素」では、基礎射影、正射影という言葉そのものは使われないが、次のように記される。ボート競技でフォームが修正できない選手がいると、コーチは選手を疲れさせてフォームを意識できなくさせる。そのとき初めて水と体が一如となって、フォームが形成される。その間の事情を次のように中井は表現する。「そのことは、内的自然の技巧としての身体構成が力学的のブンクチオンにおいてあらゆる嘘言 Lüge を脱落した時『見てくれ』の粉飾を放擲した時である。筋肉を主観とし、筋肉を客観とする血の構成がそこにその自らのはからいをして、純粹なる行為の中に自らを没したる時である」(中井 1981a 420→中井 1995 102)。

ここでは「基礎射影」に相当する本来のフォームを獲得するのに妨げとなるものが「嘘言」とされる。

その点で、「委員会の論理」16で、基礎射影を歪めるものとして「嘘言」が位置づけられるのと共通する。その意味でも、これらは荒瀬(1978)の読解の妥当性を裏づける。

他方、後藤(2000b)、後藤(2000c)でもみたように、「委員会の論理」の7の全体において、「確信」と「主張」の相違は、「嘘言」の有無、つまり前者には「嘘言」がないのに後者には「嘘言」が存在する点にあると指摘され、なおかつ「嘘言」を伴う「主張」が、「委員会の論理」8で肯定的に捉えられるという論の運び方がなされる。

したがって中井における「嘘言」の位置は、「委員会の論理」7が8に発展するための、1つの弁証法的な踏み台、つまり正、反、合の「反」に相当する。その点では針生・松岡(1982)や上野(1997)の理解に適合的である。そう考えると、基礎射影を歪めるものとして「嘘言」を捉えた「委員会の論理」16の、「嘘言」への否定的な見解や、『美学入門』等の「嘘言」へのやはり否定的な見解と、「委員会の論理」の7から8にかけての「嘘言」への肯定へと至る記述とを、矛盾なく読むことができる。

しかしこれら7と8の2つの章の間に距離がある。「委員会の論理」の7では、「確信」の立場から「主張」のもつ嘘言性を否定的に捉えるのに、8では「主張」の地点にたった立論がなされ、「主張」こそが必要不可欠であるとされ、7の「嘘言」への批判は消える。したがって結局、8において「嘘言」は肯定される。なぜなら8では「嘘言」への言及は消えるものの、7で「嘘言」を必然的に伴うものであるとされた「主張」が8では所与の前

提とされるからである。

後藤宏行(1965)は次のように述べる。「しかし、ここで問題にされなければならないのは、『嘘言の構造』から『否定判断の機構』への転換のメントで、あきらかな論理的次元でのすりかえがおこなわれていることである」(後藤(宏) 1965 280)。後藤(宏)(1965)は、中井のなかに「嘘言」の肯定とその否定とが併存する点を指摘している。その意味で、松岡(1982)や上野(1997)の「嘘言」の肯定への注目と、荒瀬(1978)の「嘘言」の否定への着目を、先駆的な業績である後藤(宏)(1965)は併せもつ。後藤(宏)(1965)のいうには、認識の論理の問題としては「嘘言」の媒介の議論を貫くことが重要であるのに、『否定判断の機構』の論理は、組織の論理であり、それを認識の論理にそのまま接合する点に論理のすり替えがある。その上で後藤(宏)は、「嘘言」の可能性の議論の芽が中井に存在しつつ、それが展開されなかつことを惜しむとする。

このように、「委員会の論理」の7と8の間で、認識の論理から組織の論理へのすりかえがあるという後藤宏行の批判は、その通りであるが、本稿では、そもそもそのすりかえこそ弁証法的な論理が「媒介」たり得る理由であると考えたい。つまり認識の論理から組織の論理へと発展しつつ、なおかつ認識の論理の地点からの評価・判断もふり返られる形を貫く点に、弁証法的な論理の展開があると考えられる。その認識の論理からの事後的な評価・判断が、結果的に認識の論理に組織の論理をもちこんだ様相を呈するに至る。カントの『第1批判』から『第2批判』に移行する過程で、純粹の認識の論理からすると「嘘言」が現れる、その意味に中井の「嘘言」を捉える。

例えば1930年の「文学の構成」では、「嘘言」と「確信」と「主張」の関係を次のように記す。「『SはPである』と内的言語形式において確信せざる場合、しかも外的言語形式において『SはPである』と主張する場合、その『ある』は論理的エレメントのSとPを複合連続するコプラではなくして、社会的エレメントである発言者と聴取者を複合体たらしむるメントである。そこに『SはPである』の一命題に内的と外的、確信と主張、思弁的と歴史的、テオリーとプラクシス、ディアレクティク(弁証)とディアレクティケー(討論)の二つの領域における『ある』の構造を見だす。たとい数学の公式にしても、主張の立場では了解の容易を企図するところの技術に関連をもつ以上、それは社会的である。またたとい社会科学といえども、それが普遍をめざす検討である以上、理論的である。その意味ですべての『ある』の意味は、こ

の二つの領域を出入りするところの『中間者』となる」(中井 1964 259-260)。つまり「了解の容易」という啓蒙性に「主張」の領域は係わるし、それはテオリー、つまり「純粹理性」に対するプラクシス、「実践理性」に親和性のある領域である。ある意味では後藤(宏)のいう「『嘘言』は、認識の論理そのものに内在する必然的契機として、確信と主張をつなぐ弁証法的な連続性の『媒体』とかんがえられなければならないもののはずである」(後藤(宏) 1965 280-281)るという指摘も、その意味に理解できる。その点で、「確信」と「主張」を統合し繋いでいく機能、すなわち両者の媒介の役割は、カントの『第3批判』的な領域の問題となる(中井 1936→中井 1981a 62)し、そのような両者の媒介に「嘘言」が生じると理解できる。

3. 「嘘言」と利潤機構

今検討したように、「委員会の論理」では、コミュニケーション過程における「嘘言」の媒介が示される。自分の「確信」を「主張」として集団化する際に「嘘言」は必要不可欠になる。他方以下にみるように、集団化のなかでの「嘘言」を否定する文章も中井に存在する。この集団化への否定的言辞は、利潤機構への批判に重なる。

例えば「嘘言」という言葉はないものの、そもそも集団への自らのすり寄りを批判的に捉えた論文として、1930年の「絵画の不安」が挙げられる。ハイデッガーが批判的に述べる「軌道の上の生活」という概念に中井はふれつつ、それは「在来の考え方た、ありきたりの日常性の中に樂々と生きることである。眞の自分を掘り下げることにぶらせることである」(中井 1965 171)とした上で、次のように指摘する。「自分に畏ることなくかえって、独自の意見を失って人とあるいは党派と異なることへののみの怖れ、自分でありながら自分の外に住むこと、世間への自己解体、自己溶解、これらの墜落を彼はすべてを吸いこむところの渦流(Wirbel)という」(中井 1965 171-172)。ここでの中井は存在論に全面的に依拠して、「眞の自分を掘り下げるここと、つまり「委員会の論理」の表現を用いると、「意味の深化」つまり「確信」を深める方向が望ましいとする。他方「独自の意見を失って人とあるいは党派と異なることへののみの怖れ」とは、「委員会の論理」の表現を用いれば、「意味の拡延」つまり「主張」の方向へと歩むものであるが、この論文では、それは否定的に評価される。つまり存在論の影響の大きいこの時期の中井にとって、自分の思うところを深めることだけが真であり、他者を顧みると、その言説は「嘘言」

となる。

また先ほど 2. の終わりでその一部をみた、1930年の「文学の構成」では、「主張」の嘘言性が「委員会の論理」よりも明確に記される。「内にいう言葉、すなわち『思う』こと『確信する』ことの意味充足性はそれ自身、ハイデッガーのいう意味において、時間的悲劇性を帯びている。その内面的な充足方向がひとたび外に向う時、そこにある内なる言葉と外なる言葉の不連続性、すなわち嘘言性は人が『自分』に見いだすところの第一の空間的距離である」(中井 1964 261)。ここでは「内なる言葉と外なる言葉の不連続性、すなわち嘘言性」という形で、全ての「確信」と「主張」の間に嘘言性を認める。この「文学の構成」は同じ年に書かれた「絵画の不安」と同様、「主張」を「嘘言」に媒介されたものとして、「委員会の論理」とは異なり、明確に否定的に捉える。

というのも「委員会の論理」では次のように記されるからである。「内的確信において肯定せるものを、外的主張で否定をもって承認を求める場合、あるいは内的確信において否定せるものを、外的主張で肯定をもって承認を求める場合、そのいずれにもせよ、それは嘘言を構成する。しかし、厳密にいわしむれば、いずれの言か嘘言ならざるといいたいほど、日常および公的生活は、嘘言に充ちている」(中井 1936→中井 1981a 70)。この引用文の「しかし」以前の部分では「内的確信」での「肯定」「否定」と「外的主張」での「肯定」「否定」との間にズレがある場合のみ、「嘘言」となるからである。しかも先に 2. でみたように、「委員会の論理」では、嘘言も主張も、一定の範囲内においてあるが、肯定されていた。

では、このようにこの「文学の構成」で全てが「嘘言」になる理由はどこにあるのか。中井はその理由を利潤に求める。「現代の言語構成において、自分を自分から隔離し、思う言葉をいわしめず、いう言葉を思わしめない、そしてすべての発言をして嘘言たらしめ、『怯懦と二枚舌、地上の知恵の最後の決定者としての二、三の流行語に甘んじてしまう精神的知足安分、無限に分裂した朋党の瞞しあい・・・・』等々を導きだすところの人間に贈られたるパンドーラの箱、すなわちそれは利潤取得に感ずる愉悦ならびにその利潤そのものへの垂涎である」(中井 1964 266-267)。

ここでは「すべての発言をして嘘言たらしめ」るというように、あらゆる発言を「嘘言」と考える発想を探ることが注目される。しかも全ての発言が「嘘言」となる理由は、「人間に贈られたるパンドーラの箱」であるところの、人々が利潤を求める心にあるという。

ここの中井の発言の趣旨を本稿なりに敷衍してみよう。

他者の認知を求めるとき、他者の需要に応じたものを作ることになる。すなわち最終的に、他者の購買欲に適うものの製作が望まれる。我々が利潤機構的な社会に住む限り、他人を顧慮することは、売れるものを作ることに限りなく近づく。直接に商品を作らなくても、他者からの認知を求めた創作や発言、つまり「主張」は、純粹な創作欲を金に売り渡した状態に接近させる。極論すれば、利潤機構的社会を止揚しない限り、わが道をひたすら引き目もふらずに進む以外、いずれ金に魂を売り、「嘘言」を吐く。

そこで1930年の「文学の構成」、「絵画の不安」について、今みてきた検討をふまえて、改めて1936年の「委員会の論理」の記述をふり返ろう。

「委員会の論理」の 7 の「嘘言」のでてくる箇所で、「確信」の表現である答案に対して審査は同意的肯定の量的転化であるとされる。さらに投票も同様、同意的肯定の量的転化である(中井 1936→中井 1981a 72)。それらに言及した後、次のように続けられる。「現今におけるごとき利潤機構において、出版活動内における思想行動は、その同意的肯定の量の大衆的徵表が、著書の購買となってあらわれいざる場合もある。そのいずれにもせよ、嘘言への好餌をじゅうぶんに用意している」(中井 1936→中井 1981a 72)。ここでは、「出版活動内における思想行動」に限ってであるが、先にみた「文学の構成」同様、「利潤機構」が「嘘言」を導く形になっている。いわば「現今におけるごとき利潤機構において」、「同意的肯定の量」という形で、量への志向が、「著書の購買」という商品の問題となって現れる。この「著書の購買」という表現は、同じ「委員会の論理」における、3つの時代区分において、近代が「印刷される論理」の時代であることを想起させる。古典・古代がソクラテスの產婆法等の、「言われる論理」の時代であり、送り手と受け手との双方向的コミュニケーションが可能であった(中井 1936→中井 1981a 47)のに対して、中世は「書かれる論理」の時代である。この「書かれる論理」の時代とは、写本が中心的な情報媒体の時代であり、一義的解釈を強要し(中井 1936→中井 1981a 52)、送り手が優位にたった。他方活字文化の誕生とともに、近代は「印刷される論理」の時代となり、形態は「書かれる論理」同様書物であるが、ここでの書き言葉は印刷され、複製されることで、受け手と送り手の双方向的コミュニケーションの可能性を開く解釈の自由というものをもたらし、その限りで「言われる論理」の双方向性が復活する。この「印刷される論理」が双方向性を導くという近代認識こそが、商品としての量への志向が 1 つの疎外でありつつ、解放をもたらす

すと中井が理解していたことを示す。つまり複製された本の読者が相互に語ることが、商品性の矛盾の止揚への筋道をつけてくれる。

以上纏めると、「文学の構成」では、全ての言説が発言という形で他者に向けられると「嘘言」になるとされ、その理由として利潤への誘惑を挙げていた。他方「委員会の論理」では、論理的には「内的確信」と「外的主張」とで「肯定」「否定」にズレがある場合のみが「嘘言」になると示唆されるし、「嘘言」になる理由に利潤機構を挙げるのは、例示したもののうち出版活動に限られ、答案の審査や投票は利潤機構との関わりから外される。その点で「文学の構成」と「委員会の論理」で相違がある。

しかしこのように「文学の構成」と「委員会の論理」の間には相違はあるものの、逆に「文学の構成」の、全てが利潤機構に毒されるという批判的観点から、今みた「委員会の論理」⁷の、本稿で2段落前引用した部分を読み返すと、よい点を欲しいがために気に入られる答案を書くこと、採録されるために編集委員やレフェリーに受け容れられる論文に書き改めること、票を欲しいがために信念を曲げた選挙演説をすることは、売るために自分の「確信」を曲げたり和らげたりして著書を公刊することと変わらない。つまり出版物のように直接、商品の形態を探ろうが、答案や学会論文や選挙演説のように商品以外の形をしていようが、他者の評価を顧慮して自己の「確信」を少しでも歪めると、商品性の害毒の影響あるいはそれと同類の影響を被ることになる。

したがってその意味で「委員会の論理」の14や15では、商品性及び専門性の止揚によって、我々の社会を利潤機構的な社会から解放することが示されているといえる。そのような商品性と専門性の止揚によって、「嘘言」と結びつかざるを得なかった他者への顧慮が、「嘘言」から解放された形での他者への顧慮へと止揚されると理解できよう。それが「委員会の論理」全体の大筋であろう。そのような読みを通じてのみ、「委員会の論理」の嘘言の否定という荒瀬（1978）の読解と、針生・松岡（1982）や上野（1997）の嘘言の肯定という解釈が、統合され得るのである。しかしその結論へと至る前にまず、中井の利潤機構への態度も2重性ないしは矛盾があるので、それを4.の前半部分ではみておこう。そして4.の終わりの方で、その2重性の問題と「委員会の論理」14や15との繋がりを、改めて考察したい。

4. 中井の利潤機構への態度の2重性

4.1 『美学入門』における2重性

基本的に中井において利潤機構は否定され、止揚されるべき存在である。しかしレンズやレコード針等、中井のいう集団的芸術を可能にする媒体は、利潤機構あって初めて我々の眼前に提供される。したがって彼の利潤機構への態度は2重性を帯びる。基本的に否定されるべきであるが、それを前提にしなければ、次の展開はない点では、一定の肯定的な評価が与えられる。ちょうど資本主義が高度に発達することが、それを否定する社会主义社会のうまれる前提としては必要であると考えたマルクスが、先進国イギリスこそまっ先に社会主义化すると予測したのと同様であろう。そのあたりの2重の評価の仔細を、中井のテキストから追おう。

利潤機構への批判的表現は、枚挙に暇ない。

他方中井が1929年の「機械美の構造」など初期の論文で、機械を肯定的に捉えたことは周知のことである。例えばこの論文では、ギリシア以来の、ミマーシス的芸術観がロマン派によって崩されて、技術と模倣に対して天才と独創を重んじる芸術至上主義的な芸術観が一度は定着したが（中井 1964 240），レンズの発明によって、機械化された情報機器が、機械の見方、「レンズの見かた」（中井 1964 244）を我々に強いて、ギリシアのミマーシス的な芸術観が、ロマン派を経て止揚された形で新たに再現されているという（中井 1964 252）。だがそのようなレンズを初めとする機械は、現実的には利潤機構あって初めて発明され、大企業の実験室で技術革新が加えられ、工業製品として普及していく。

そのあたりの認識は、『美学入門』の終わりの方にも表明されている。そこでは中井自身のテキストにおいて、レンズなどの機械技術によって生産される情報媒体が、利潤機構を通じて発明される点が、明確に意識されている。

第一次世界大戦後のキリコ、ムンクらの芸術家の不安と機械文明への憎悪を記すなかで、中井は、それらの憎しみが、利潤機構への嫌悪に通じると指摘する。「それは利潤機構がもつ価値の貨幣化によって来るところの人間の規格化、価値の平面化、教養の一様化、人格の就職化等を『機械』として象徴して憎悪しているのである」（中井 1951 147→中井 1964 137）。これらの芸術家たちは、機械を利潤機構のもたらす価値の平準化の象徴として嫌悪する。ならば、この引用文の文脈をそのまま中井の全般的な態度にあてはめると、後藤（2000c）でも確かめた、レンズへの期待にみられる中井の機械への肯定的な評価は、利潤機構のもたらす価値の平準化をも含めた肯定といえる。少なくとも利潤機構のもたらす価値の平準化に対しても、そこから弁証法的な止揚がなされる限り、次

なる発展に必要な1プロセスとして、中井が一定の評価を与えると理解できる。

この価値の平準化は、自らの「確信」を深めることの対極に位置する。いわば中井の用語で「確信」が「主張」に転じる局面に、価値の平準化は避けがたく随伴する。なぜなら中井において「確信」は質的な深まりを求めるのに対して、「主張」は量的な広がりを志向するからである。そして「主張」においても価値の平準化を避けるならば、利潤機構のもたらす「商品性」を止揚することが必要であり、それが「委員会の論理」の14や15の主旨である。

この利潤機構への二価的な態度が、より明確に示されるのが、レコードと音楽の大衆化に触れるくだりである。「軽音楽の世界もこゝにあるのである。・・・それはかつて奴隸が演奏家であり、又封建隸従者が演ずるものであつた時代とは全く異つた意味で、レコードが生れ、販売される音楽として新しい音楽の位置を築きつゝある」(中井 1951 67→中井 1964 61)。レコードによって軽音楽が「販売される音楽」となったことに対して、従来の音楽の演奏者を「奴隸」、「封建的隸従者」と表現することからも、彼は軽音楽に一定の積極的評価を与えていたといえる。この引用部分に続けて、次のように記される。「それは利潤を求めて製作され、利潤を求めるために頒布される。音楽の新しい運命であるとも云える。なるほどそれは大衆化されてはいるが、利潤対象としての大衆が、そこに運命づけられて生れているかもしれない。音楽が、この利潤の隸従者となりつゝあると云うことも云えるのである」(中井 1951 67→中井 1964 61-62)。この引用部分で、先行する引用部分で従来の音楽の演奏者に与えた「隸従者」という表現を、次に「この利潤の隸従者」として「音楽」の方に与える。つまり演奏者を封建的隸従から解放する、商品としての軽音楽であるが、今度は音楽そのものが利潤に隸従する。

これらの表現を追うと、中井において利潤機構や商品性は、最初の解放の契機でありつつ、次なる束縛をもたらす。最初の解放をもたらす限りで、利潤機構に一定の評価が与えられる。次なる束縛を解く道筋さえ擱めたならば、それは肯定される。

今みた引用部分の続きで、次のように肯定の側に近づいた評価が示される。「しかし、とにかく音楽が、今や大衆のものとして、その形を整えようとしてもがいでいることに、我々は大きな歴史的反省をしなければならないのである」(中井 1951 67→中井 1964 62)。つまり先行する引用部分で「この利潤の隸従者」と否定的に評された軽音楽であるが、音楽の大衆化そのものは肯定したい。

そのような両価性が「しかし」という接続詞に表されているし、「われわれは大きな歴史的反省をしなければならない」という章句にも、それは窺える。

そこで、次の段落で「大きな革命」という評言が与えられる。「これが、映画のトーキーの発達とともに、又ラジオの出現とともに、電気の構造の中に、音楽がその表現力をもつて現れていることは、大きな革命を、音楽の世界で人類は成し遂げつつあるのである」(中井 1951 67→中井 1964 62)。つまり利潤機構の解放的側面と隸従的側面の両面をふまえた形の議論が、映画に関連する電気機械の議論に移行すると、解放の側面が前面にでる。

しかしこではあまり明確に記されないが、そもそも機械が利潤機構の賜であるし、中井のテキストにおいても、先の『美学入門』の終わりの部分からの引用部分以外でも、それは充分意識される。

そこで次にひとまず『美学入門』から離れて、それ以外から彼の利潤機構への評価を論じよう。そして併せて、次なる束縛を解く道筋がはたして何なのかも考えていくこととする。

4.2 他のテキストにおける2重性

1932年の「思想的危機における芸術ならびにその動向」では、彼の著作を全体として眺めた場合、肯定的な評価が当然与えられる「レンズ」や「委員会」が、「利潤」という言葉に随伴して示される。「(演劇、映画の株式会社制度は) レンズを眼とし、委員会を決意とし、企画を夢想とし、統計をその反省とするところの一つの利潤的集団的機関である」(中井 1965 53[括弧は後藤記])。いわばこの対句的表現の後半部分、すなわち「レンズ」に対する「眼」、「委員会」に対する「決意」、「企画」に対する「夢想」、「統計」に対する「反省」が、それぞれ個人主義に関連する。他方対句の前半部分の「レンズ」「委員会」「企画」「統計」が集団的であるし、その集団性は「一つの利潤的集団的機関である」という表現からも利潤と結びつく。

そこで、今みた引用文の前の段落をみると、対句の後半部分に相当する個人主義的なものは、ロマン派以来の天才贊美の志向を指すことが分かる。「個人主義天才主義の芸術がみずから自由通商主義を本質とする利潤構成によって、ついに集団化するにいたり、文学は雑誌新聞の利潤的存在のために、営利的企画、社会の要求の反映、ならびに編集の構造の中への適応を余儀なくされている」(中井 1965 53)。芸術における天才贊美の個人主義は、経済において「自由通商主義」を擁護するが、「自由通商主義」はまた、「利潤」を当然求める。利潤を追求すると、

現代のように機械化が進んだ状況では、個人主義のままでは競争できなくなり、必然的に集団主義を求める。したがって個人主義、天才主義は、それ自らのなかに、自らを否定する契機をもつ。そして1つの例として新聞や雑誌という「利潤的存在」を発表媒体とする現代の文学が、新聞社や雑誌社の営業的配慮や社会の諸々の要求を受け容れざるを得ない状況を、挙げる。

その次に絵画、さらに演劇や映画の例を示す。「演劇および映画のきわめて明白な株式会社制度は天才をスターとよび監督とよび共に会社の *Ingenieur* である」(中井 1965 53)。この文章に続いて、本稿2段落前の最初に引用した文章が現れる。そしてその文章のすぐ後、次の文章が現れる。「そこでは指令と統制と経済状態がその健康度の機能となるのである。われわれはその構成のどこの底に自由なる天才の姿を求めるべきであろう」(中井 1965 53)。ここで「そこでは」という「そこ」とは、直接には前の文の「一つの利潤的集団的機関」という部分を受けるし、さらにその前の文章の「演劇および映画のきわめて明白な株式会社制度」を受けていよう。つまり株式会社制度を採る利潤的集団的機関である映画や演劇では、「指令と統制」という集団の組織としての機能や「経済状態」が当然、作品や事業の「健康度」、すなわち成功・不成功の基準となる。すると集団性と利潤が前面にでて、「自由なる天才の姿」は求められなくなる。続けて次のように記される。「そこではウーファあるいはパラマウント、日活あるいは松竹等等の芸術的性格を見いだすのであって、監督の個性よりも、レンズとフィルムの類型の方がより大いなる性格差をそこにもたらすのである」(中井 1965 53)。なおこれらの表現は、天才が利潤機構に抹殺される点を強調する訳で、先にみた「機械美の構造」(1929)など多くの著述を通して中井が示す、恩師の深田康算譲りの天才批判とは大いに落差がある。

次にこの文章を、比較的近い時期である1931年に発表された「物理的集団的性格」と比較しよう。ここでも本稿前段落の引用文同様、会社の性格が問われる。彼のいう「物理的集団的性格」とは、それぞれの会社の情報メディア特有の性格の意味に解せられる。「イーストマン、アグファ、パテー、ボレクス、デュポンなどの会社によるフィルムなど。あるいは九・五、十六、三十五ミリなど、またはポジティヴ、ネガティヴ、反転、パンクロマティックなどのそれぞれのもつ明暗の強弱、抜けの良否、およびそのもつ特有の機能、またそれらの組みあわせのもつ機能、それらはいかなる個人もが左右できない標準性である」(中井 1964 161)。したがって「物理的集団的性格」は、それぞれの会社の商品の性格である。商品の

もたらす標準性が「物理的集団的性格」であるという意味で、利潤機構と切っても切れない関係となる。「九・五、十六、三十五ミリ」などのフィルムの大きさや、「ポジティヴ、ネガティヴ、反転、パンクロマティック」などの技術は、会社個々の特色というよりは、フィルム会社全体の技術進展に係る領域であるが、「そのもつ特有の機能」だけでなく、「イーストマン、アグファ、パテー、ボレクス、デュポンなどの会社によるフィルム」の相違もかけ併せた、機能の組みあわせも考えられる。そのことは、1932年の「思想的危機における芸術ならびにその動向」に関して先ほどみた「監督の個性」より、「ウーファあるいはパラマウント、日活あるいは松竹等等の芸術的性格」が重要になるという部分にも照応する。

しかし「物理的集団的性格」では今みた引用部分に続けて、次のように記される。「しかもそれはまた個人が達すべくもないかなたにみずから視覚が探し入りたる一つの深度表でもある。その類型を私は物理的集団的性格と呼ぶのである。集団的技術のその時そこまでたどりたる標準なのである」(中井 1964 161)。このように先の引用部分における「標準性」を、「深度表」という形で、深さにおきかえることからも、ここでの中井はこのような利潤機構の与える標準性、すなわち「物理的集団的性格」を、「基礎射影」を獲得する1つの条件としていて、肯定的に理解する。

他方この機械のもつ個性を否定的に捉えたテキストも存在する。1933年の「蓄音器の針」である。「何の針をとってもヴィクターのソフトはヴィクターのソフトだ。針は現にひとつひとつ違っているのだがやはりヴィクターのソフトだ。どのひとつひとつもが一つの『型』にしかすぎない」(中井 1981b 17)。このようにビクターの針相互にも個性はあるものの、ビクターの針全体の個性、「型」があると、中井は指摘する。「『型』の出現は一応販売あるいは組織から要求されてきたことである」(中井 1981b 17)。商品の販売という会社組織の要求で、商品の「型」、つまりレコード針の会社の個性が生じる。しかし「型」にはめ得るのは通常の商品だけではない。労働力商品も「型」にはめ得る。

したがって以下のように記される。「今人間もようやく政策あるいは就職の形式をもって、道具化商品化しつつある。すなわち『型』可能形の中にはめられつつある」(中井 1981b 17)。人も「就職」し、労働力を商品として資本家に賣ることで生活の糧を得るから、「型」にはめられるし、独占資本と結託したファシズム権力は、その「型」を人々に「政策」的に押しつける。特に「型」にはまったく労働力商品を準備する工場が学校であるので、

教育・研究の場への介入をもって、「型」の「政策」的押しつけは完遂する。大学への政府の介入によって、人を商品に作りあげるという当初の目的が貫徹させる。「個別性の最後の拠處でもあった」「大学」が、滝川事件という「歴史的転落」によって、「はかなくも崩れ去りつつある」と述べた上で、次のように記される。

「すでに政策と就職によって、社会より一定の『型』の性格を強制せらるる場合、もしそれに追従するとすれば、何の研究を取り来たっても、何の研究者を取り来たっても一つの『型』がそこにできあがるのであって、それは人間ではなくして、一つの標準型の道具であり、販売化された商品である。過去の規定によるところの現在の強制であって、現在の不合理を飛躍するところの未来の展望では決してありえない」(中井 1981b 18)。

先にみた、1931年の「物理的集団的性格」では、商品であるフィルムなどの情報メディアの技術水準が、我々がものを見る際の「深度表」になると、い、「基礎射影」に近い意味で肯定的に捉えられた。ところがここではこの「深度表」に相当する、「思想的危機における芸術ならびにその動向」の用語である「標準性」に、ほぼ文字面も近く、内容も似ている「標準型」という言葉が、否定的に解される。「現在の強制であって、現在の不合理を飛躍するところの未来の展望では決してありえない」という形で、彼のいう「基礎射影」と反対の位置におかれる。

1931年の「物理的集団的性格」で、肯定的に捉えたメーカーの個性であるが、この1933年の「蓄音器の針」では否定する。この相違の理由は、「蓄音器の針」で言及された滝川事件の前か後かが大であろう。

しかし滝川事件の後でも、1937年の「集団的芸術」では再びメーカーの個性を肯定する。「一九〇〇年代以後、機械文明の進歩とともに、また大資本の運用の発展とともに、人間の個性よりも、一つの集団の性格が芸術の一部門となりはじめた」(中井 1965 189)。「一つの集団の性格が芸術の一部門となりはじめた」という中井が、映画をその変化の代表とみなして肯定的に捉える芸術上の変化は、「機械文明の進歩」と、もう1つは「大資本の運用の発展」によってもたらされる。したがってその限りで、この引用文で中井は「大資本」に肯定的である。さらに以下のように記される。「イーストマンのレンズをもった写真機をポケットにいれて、山野を歩いて写していくれば、誰でもがイーストマンの性格の一部となって動いているのである。アグフアのフィルムをもって歩けば、アグフアの性格のなかに自分の努力はとけ込まなければならない」(中井 1965 189-190)。このようにレンズやフィルムのメーカーの個性に中井は言及する。しかも次

のように続ける。「しかし、それは口惜しがる必要はないのである」。

このようにメーカーの個性を肯定する。では、なぜ「口惜しがる必要はない」のか。「自分が描くよりも、より機能的に果たしてくれる人類の集積としての機械が、自分に協力し、また自分もまたそれに手をあわせて動いて一つの結果をもたらせたのである。人類の協同という美わしい一つの環のなかにはいったのである」(中井 1965 190)。「人類の集積」「自分に協力」といった協同性に関わる言葉が並び、最終的には「人類の協同」という美わしい一つの環」と表現される。

そこでこの1937年の「集団的芸術」をより理解する比較の対象として、1936年の「委員会の論理」をふり返ろう。

「委員会の論理」の13では、「商品性」と「協同性」を対立概念と捉える。商品の売買性が強まると、人々は存在概念の一般性から疎外され、概念の表象のみをもつ(中井 1936→中井 1981a 98)。商品は、買い手である大衆の眼からみると表象で、実体概念と対応しているため、概念の一般性、つまり機能や目的、そのめざす方向は商品の外側からは分からぬ。したがって商品の買い手にすぎない大衆は、概念の一般性をもちあわせない。概念の一般性は「工場の秘密委員会」が独占的に握っている。したがって人々は概念の「協同性から疎外されて」いる。

なおこの直後の「委員会の論理」の14では、このような「協同性」からの「疎外」を「無批判性」といいいかえ、15では「商品性」に「無批判性」、「専門性」に「無協同性」を、それぞれ強く関連させる論理展開がなされる。

「委員会の論理」15の冒頭で次のように記す。「かくして、現段階においては、概念は前に商品性の性格によって、無批判性を導いて、大衆にとっては、一般性より疎外されて、単なる表象のみをもつことを見、さらに今、概念の専門性の性格によって、無協同性を導いて、大衆にとっては、ここでも一般性より疎外されて、単なる表象のみをもつことを顧みたのである」(中井 1936→中井 1981a 102)。ただし商品性と専門性は対立するのでも並行するのでもなく、累加していく関係が想定される。また以下の引用文にあるように、「商品性」に伴う「無批判性」の回復は、「組織的な審議性」によってなされる。他方「専門性」に伴う「無協同性」の回復は、「組織的な代表性」が行う。「商品性と専門性よりくる概念の表象化の二つのすがた、すなわち無批判性と無協同性より概念を救うにあたって、われわれは二つのものを用意しなければならない。すなわち無批判性に対しては、組織的な審議性の確保である。そして、無協同性に対しては組織的な代表

性の確立である」(中井 1936→中井 1981a 103)。

カッシーラ由来の「実体概念から機能概念へ」という中井の一貫した主張が、労働の細分化の問題と併せて、このように論じられる。機能についての議論、つまり方向性に係る判断に関しては、専門家集団、技師に委ねられ、消費者かつ労働者である大衆は議論から疎外される。商品の見かけという実体概念の部分のみを消費者は与えられ、細分化された単純労働だけを労働者は担う。しかも技師自身部分労働に従事する身である。専門以外の事柄はよく知らない。したがって機能概念を回復して全体の見通しを得る地点を、技師、労働者、消費者はもつ必要がある。それが「組織的な代表性」(以下代表性とのみ表記)と「組織的な審議性」(以下審議性とのみ表記)によって担保される。

ところが現在の検討課題の論文である1937年の「集団的芸術」では、1936年の「委員会の論理」と近い時期であるにも拘わらず、商品としての性格を有する、イーストマンのレンズやアッグファのフィルムの個性を、「委員会の論理」で、商品性や専門性を止揚するのに必要とされた審議性や代表性も特にないまま、協同性と結びつける。この2つの間にはいささか距離というか矛盾がある。

4.3 隔たりの1つの解決策—矛盾の止揚への道・・・ 「うつす」ことと「見る」こと

しかしここに「うつす」ことの中井の特殊な位置づけが介在する。機能概念的な「射影」を獲得するための「委員会」における議論の過程を、写す行為はそれ自体で代行する。その見方を採ればこの間の矛盾はある程度解決する。

後藤(2000b)でもみたが、1932年の論文「うつす」は、「うつす」行為には受動と能動、2つの光の方向がある点を強調する。カメラのレンズの光は、受動的な方向の光であるのに対して、映写機のレンズの光は能動的な方向の光になる。つまり光を受け取った側が、次には光を送りだす役割を担う。送り手と受け手とが相互にその役割を交替するという、隔週刊新聞『土曜日』で実験したコミュニケーションの双方向性を、光の受信と送信のプロセスは、そのままで実現してくれる。

利潤機構を批判してきた中井が、「集団的芸術」においてレンズの商品としての性格に関しては、楽観的にその肯定的可能性を評価する理由の一端は、この光の2方向性の議論から説明できる。しかしこれだけでは、審議性や代表性もないままに、レンズによってコミュニケーションの協同性が実現できることの、まだ半分しか説明していない。レンズによって双方向性という意味での協同

性が得られることは、以上の説明である程度分かるが、では「委員会の論理」で必要であるとみなされた、審議性や代表性がどう担保されるかは未解決のまま残される。

その問題の解決は、「委員会の論理」や「集団的芸術」とほぼ同時期の、1937年の論文「「見ること」の意味」を読むと明らかになる。見ることは、うつしとる作用であると考えられるとして、ここで中井はまず「うつす」ことを論じる。

「『うつす』という言葉には大体、映す、移す、といったように、一つの場所にあるものを、ほかの場所に移動または射影して、しかも両者が等値的な関連をもっていることを指すのである」(中井 1964 305)。この「「見ること」の意味」の文章とほとんど同じ文章が、先にみた、1932年の「うつす」にも存在した。しかし「うつす」では光の2方向性の議論が主体であったが、後藤(2000b)でもみたようにここでは連続と非連続の議論が表にててくる。「等値的関連をもっている意味では連続的であるが、二つの場所にそれが離れる意味では非連続的である。うつすということの底にはすでに、この連続と非連続の問題も深く横たわっているのである」(中井 1964 305)。うつすことは、コピーというか同じもの、「等値的関連」をもつものを、人々に広く配る点で「連続的である」し、それが異なる主体の間に配られ、空間的に隔てられる点で「非連続的である」。

さらにこの論文「「見ること」の意味」と、戦後の『美学入門』などの一連の映画論の、コプラの欠如の議論を突きあわせると、同じ映像情報を、異なった主体がわかれもち、その情報にコプラが欠如しているからこそ、「連続と非連続」であるともいえよう。因みに「コプラの欠如」と述べたが、中井のコプラの議論は概ね以下のようになる。映画にはカットとカットを繋ぐ言葉がない。「…である」「…ではない」「…と思った」「…といった」など、通常の文章の末尾に相当する、次の文章への繋ぎの言葉が映画には存在しない。これら繋ぐ言葉、コプラは、推移する事態に対する送り手の判断を示す。カットとカットがこれらコプラなしに連続することで、カットへの判断の役割は、映画の観客に委ねられる。それによって受け手の主体性が喚起される(後藤 2000c)。そしてこの「コプラの欠如」と「「見ること」の意味」をつき合せた地点から、「委員会の論理」の審議性を照らすと、「非連続」として、受け手の各主体の自由な議論に委ねられるからこそ、審議性が得られるといえる。

何かを写したり、みたりすることは、通常の我々の意味では、その情報を透明に——つまりそのものをあるがままの姿で歪みなく——写したりみたりすることになる。

あるいは透明でない場合、そこに歪める何ものかが介在すると考えられる。しかし中井において、「うつすこと」「見ること」は、連続性と非連続性を併せもつ。それは「射影」概念とも係るが、写すことは、映像という実物の等価的連関を移動させることであるから、位置が変われば見え方も変わるという意味で、別のもの、つまり「非連続」であるし、もとは同じという点で「連続」する。

「非連続」であること、つまり別のものゆえの多様性が、審議性を保証するし、半面で「連続」していること、つまりもとは同じものである点が代表性を担保する。そのような「うつすこと」「見ること」を機械において具現できる媒体が、レンズである。その意味でレンズによる映像の媒介により、「委員会の論理」においては、実質的に必要であるとされた審議性と代表性が「うつすこと」「見ること」だけで保証される契機を獲得できる。

以上のように、審議性と代表性を実現する機械あるいは情報媒体として「レンズ」は位置づけられるために、1930年代の諸論文において、一方でレンズの商品としての性格を否定的に捉えつつも、他方でレンズの解放的要素を中井は肯定的に評価するのであると推察される。しかし中井の議論を敷衍しても「見る」ことの「連続と非連続」が、審議性と代表性へと至る可能性が示唆されるだけであり、その「非連続」の部分が具体的な審議性へと至るには、「非連続」であることを、より具体化する必要がある。その点では論文「うつす」のように、対象を写しとる方向と対象を写しだす方向の双方揃うことが必要となる。

具体的に映画に即すと、人々が異なって受け取る映画への感想を相互に語りあうことで、初めてこの審議性、代表性は現実性を帯びる。あるいは印刷物に即すと、「委員会の論理」の印刷される論理のように、本というやや抽象度の高い媒体の内容が、具体的な事例に照らした討論に付せられることで、本が消費され、事実上口頭コミュニケーション同様の双方向性が獲得される。そのような見通しが中井にあった。つまり「うつすこと」「見ることは、それだけで双方向性を獲得する一步手前に及ぶが、異なって見えた像を映しだし描くことで初めて双方性は具体化する。この具体化によって、本稿3.の終わりに述べた、「委員会の論理」における「嘘言」が「嘘言」でなくなる、つまり「主張」が本当の自分の意見と化し、「嘘言」からの解放がなされるといえよう。

5. 『美学入門』の3つの空間の議論との関わりで

そこで次に再び『美学入門』のテキストに戻って、中

井の利潤機構への評価の問題を議論しよう。ここで検討するのは、後藤(2000c)でも取り上げた、コプラの不在の議論がでてくる「遠近法の空間」「図式空間」「切断空間」の箇所である。この3つの空間の議論との係わりで、この止揚への道を再確認しよう。

まず「遠近法の空間」を説明しよう。遠近法によって、この自分の見ている世界が「世界」なのだと人々は理解した。それまで自分では得られない神の高見の視点でしか「世界」は捉えられないと人々は考えた。しかし遠近法によって、自分の見る位置が自分にとっての見える「世界」の全てであり、そこを出発点にするしかないし、逆にそこを出発点にすれば一定の方向から世界は見えることに人々は気づき、近代的主観は生じたという。要はこの空間は、立つ位置による見通し、方向感覚の成立する空間である。

この「遠近法の空間」の項の最後の段落は、次の項の「図式空間」への繋ぎに相当するが、そこで「利潤」という表現が現れる。「ムンクの寂寥からはじめて、表現派より、シューピレマティズム、シュールリアリズムに至るまで、彼等は最早確固とした自らの観点を失つたのである。利潤と云う機能は利潤追及の方向に向つてのみ走つて、人間そのものを無方向たらしめる。方向の体系を失わしめる」(中井 1951 80→中井 1964 74-75)。ここでも先に、本稿で機械と利潤機構との繋がりの例としてみたムンクが登場する。利潤機構は儲かればよいという行動様式を人々に促す。中井自身の説明ではないが、利潤が獲得される限りで、資本家はAという分野に投資したり、近いBや、さらに対立するCに投資する。AとCが社会に全く逆の作用を及ぼすとしても、そのことはさほど考慮されない。このように資本は方向なく利潤だけを求めて投下される性格のものがあるので、「人間そのものを無方向たらしめる」。

続けて次のように記される。「即ち自分の個性其物を喪失しつゝあるのである。それはすでに方向をもつ体系ではない。単なる無方向なる図式である」(中井 1951 80→中井 1964 75)。つまりこの無方向性は個性の欠如に結びつく。利潤という機能は「方向をもつ体系ではない」ため、利潤機構の下に生活する我々の空間は、「遠近法の空間」でなくなり、それは自分の立つ位置の個別性を否定するものであるから、個性は消え、「単なる無方向なる図式」となる。言い換えると、利潤機構は人間を無方向にする、そのような無方向性は個性の危機であるが、そこから映画の空間である「図式空間」は生まれる。

この「図式空間」のものの見方とはレンズの見方であり、「人間集団の構成する物質の見方」(中井 1951 81→

中井 1964 76) である。そこで「図式空間」の項の終わりは次の「切斷空間」への繋ぎとして、以下のように記される。「映画の非人間的『図式空間』が、かゝる歴史的連続の一連續体となることで、人間性を巨大なる展開をもつて回復するところに深い注意が払われなくてはならない」(中井 1951 82→中井 1964 76)。ここにも中井特有の弁証法的逆説が大きく介在したレトリックが採られる。「図式空間」の非人間性を貫徹させることで、かえって「かゝる歴史的連続の一連續体」として、「人間性を巨大なる展開をもつて回復する」と。

続けて次のように記される。「人間性を奔騰せしめる主観を確立した『体系空間』よりも、もつと高度に、人間の歴史的感覚を呼びさしますものとして、『図式的空間』がその役割を果すことを忘れてはならない。即『主体性』の出現がそれである」(中井 1951 82→中井 1964 76)。この文章を結びとして、次の「切斷空間」の項へと移る。その「切斷空間」の項で大衆の「主体性」の問題が示される。そのことへの繋ぎの意味もあって、今の引用部分において「『主体性』の出現がそれである」という表現がみられる。「体系空間」は主觀性を確立した。しかしその主觀性が、利潤機構とそれに基づく情報メディアの機械化によって、崩されるに至っているのが「図式空間」である。しかしその「図式空間」の疎外を徹底させて、その底から生じてくる「切斷空間」において、一度崩壊したかのようにみえる「主觀性」は「主体性」という形で止揚されて復活する。この「主觀性」と「主体性」との弁証法的な構成が、主觀と主体とを対立的に併記したことこの引用部分の表現に窺える。この「主体性」という言葉から、「受け手主体」という表現まで距離はあと僅かである。

次の「切斷空間」の項において、「又逆に云えば、この非人情な『図式空間』と『図式空間』とのカットの切斷面が大衆の歴史的主体的意欲を擊発するとも云えるのである」(中井 1951 83→中井 1964 78)と記される。結局「図式空間」の「非人情性」がかえって、「大衆の歴史的主体的意欲を擊発」する誘因となる。「図式空間」の項の終わりのところで述べられた、疎外を徹底させることで、そこからの解放もより大きくなる。利潤機構がうみだした情報メディアによって捉えられた空間が疎外のままに留まっているのが「図式空間」であり、それらが切斷されることで、かえってそれら相互を大衆自身の手で大衆自らが主体的に繋ぐのが「切斷空間」である。したがって利潤機構の疎外を徹底させて解放に至るのが「切斷空間」であるし、後藤(2000c)で検討し、本稿4.3で若干ふれた中井のコプラの不在の議論も、その文脈からも理

解され得る。

つまりレンズの見方である「図式空間」は、利潤機構により「遠近法の空間」が崩れると成立し、人間を無方向にし個性を危機に貶めるが、その「図式空間」の疎外状況が「図式空間」をコプラなしに繋ぎ合わせた「切斷空間」において、徹底化され、弁証法的な解放への1つの契機をもたらす。『美学入門』でのレンズの商品性の肯定的評価も、この疎外の徹底とそこからの解放という文脈から理解できる。

「図式空間」の疎外からうまれる「切斷空間」は、受け手の主体性が発揮される空間である。この「図式空間」から「切斷空間」への展開を、本稿では中井の弁証法的な論理の展開という説明で、疎外状況から解放への転化と理解した。そのような転化への具体的な契機は、受け手の主体性への意識の芽生えに求められよう。

さらにこれに方向性の観点からの説明を加えてみよう。「図式空間」は利潤機構という人々を無方向にする状況からうまれる。しかし送り手の側のこの無方向性が、かえって自ら方向を定める意味での方向の決定権を受け手に与える。そして中井が『土曜日』の実践と「委員会の論理」、『美学入門』において、一貫してコミュニケーションの受け手と送り手との対等性、双方向性を実現すべく努めたのも、この方向と利潤機構の関係からも説明できる。双方向性が成立すると、片方が一方的にもう片方に方向を押しつけられない。方向を受け手自身が定めるためには、利潤機構という人々を無方向にする状況も、かえって好都合になるからである。

しかしその場合でも本稿4.の終わりに記したように、受け手自ら新たな方向をみいだすため、自分たちのあるべき方向について相互に討論しないと、「委員会の論理」でいう審議性は得られない。いわば方向性の欠如という利潤機構のもたらす疎外状況を、方向を自分たちの手で決めるという解放の道筋へと読みかえるには、受け手自身が映画や印刷物をどうみたか、どう読んだかという、光の2方向性の議論の表現を用いると、映写機の光の方向における発言が必要となる。その段階に至ると自らの方向を歪みなく定めるために、利潤機構の影響は再び排除されるべきと想定されるのであろう。その点、中井自身の記述は明確ではないが、彼の発言をこのように複数のテキストを突き合わせて敷衍、再構成し、そこで得られた示唆を汲みとる限り、実質的な受け手からの発言が必要とされるといえる。それがあつてはじめて、本稿で指摘したような、中井のなかの「嘘言」性や商品性に関する矛盾も、止揚され得る。

6. 総論

まず 1. で問題状況を概観し、2. で中井のコミュニケーション論における「嘘言」の媒介を指摘した先行業績を追った。次に 3. で、後藤 (2000a), 後藤 (2000c) で議論した、「委員会の論理」7 と 8 との裂け目を媒介する中井の「嘘言」が、他者に受け容れられる言説をうみだす際、商品性に絡めとられる可能性を孕む点を、確かめた。次の 4. で、後藤 (2000a) で論じた光の 2 方向性の議論と、この利潤機構の問題を重ねあわせた。現代では情報媒体が機械化され、それぞれのブランドの個性が媒体に刻印されている。したがって透明に現実を写すつもりでも、そこに会社の個性が反映され、情報媒体にのせられた情報の透明性を歪める。しかし光にはカメラの方向と映写機の方向の、2 方向ある。しかも機械技術に支えられた情報の記録媒体は複製可能で、多くの人々がそれら基本的に同一の情報をわかつもつ。基本的には同じでありつつ、2 方向いずれにあるかで、微妙に違う情報を多くの人々が共有するので、利潤機構の下にある社の個性が浸透した情報媒体を経た情報であっても、多様性は確保され、双方向的批判は可能となる。したがって、そのためにはカメラの方向だけでなく、映写機の方向も必要となる。なぜなら多くの人びとが実質的に双方向的な言説を行い、複製された情報財について議論をし、微妙な差異のある《異本》を作ることで、情報財が商品であることに由来する歪みは、のりこえ可能になるからである。

さらに後藤 (2000c) で『美学入門』に即して検討した、中井の 3 つの空間の分類の議論は、疎外状況の徹底により受け手の主体性を喚起させるというものであったが、本稿の 5. では、その疎外が具体的には、機械的情報媒体に送り手が頼ることによって、もたらされる点を論じた。送り手が利潤機構によって疎外され、方向性を見失うことで、逆説的に受け手の立場からすると方向の自由が生じ、双方向に開かれたコミュニケーションが、現実化する。

以上、中井のコミュニケーション論に「嘘言」の媒介があるという、後藤 (2000b), 後藤 (2000c) の議論を、さらに展開させて、「嘘言」の原因に商品性の問題が関与する点を論じた。中井は商品性を強く否定するが、その否定は、商品や商品化された情報媒体に対する全否定ではない。疎外状況の貫徹により、それがのりこえ得るという逆説的な筋道を中井は想定していた。以上の点を本稿ではみてきた。

中井は情報媒体の商品性や嘘言性を、一方では否定的

に評価しつつ、他方その積極面を肯定的に評価する。それは単純に両論併記ないしは事物の多面性への着目なのか、そうではなくて事柄の過渡的な性格に着目しつつ、両者を矛盾と捉え、その矛盾が弁証法的に発展すると中井が考えていたかどうかが問われる。本稿では、一見バラバラに併置されているかのような、中井の双方の記述及びそれら以外の文章をつき合わせることによって、これらが単に両論併記ではなく、弁証法的な意味での矛盾であると考えた。情報財は商品であり、利潤機構に組み込まれているが故にコミュニケーションを歪めるものであるが、同時に情報財には、我々の感覚の届く範囲を拡張し、コミュニケーションの前提となる認識を豊かにするという意味で、そのような歪みを否定する要因が必然的に内在していると考えられる。

では、それらの矛盾を止揚する方向性は中井によってどのように示されているのであろうか。

それは、1. で記した、矛盾の理由及びそれを統合する枠組みは何なのか、という仮説に答える形で言い換えられよう。矛盾の 1 つの理由は、商品としての情報媒体に商品としての「型」があることで、情報を歪める点に着目しつつ、情報技術の発展が我々の可能性を開く点にある。そこに 5. で強調したように、疎外の徹底が解放をより大きくするという中井の弁証法が介在する。そして理由の 2 つめとして、商品であることで複製可能性と歪みの可能性が併せもたれ、多様な《異本》が作られる点が挙げられる。具体的には複製された同一の作品に対する多様な議論を可能にする。おそらくはここに量から質への弁証法的な転化というものが介在しよう。そのような多様な双方向的な議論によって「委員会の論理」でみられた商品性を乗り越える 2 つの道、つまり審議性や代表性が担保される。つまり商品性の欠点である歪みが、商品性の乗り越えの手段も与える。あるいは『美学入門』の表現でいうと、映画のカットは、カット相互がコプラ（繋詞）なしに結びつけられる。それは対象から方向性を奪うという意味で商品性による疎外の典型といえる。しかしコプラなしに結びつけられた映像をみる観客は、主体的にコプラを想像力で埋めて、双方向的に映画について議論する機会をもつ。ここでも商品性による疎外状況が商品性の乗り越えの手段も与える。以上の点で、中井の矛盾は統合され得る。

以上の問題の考察が 1. で触れたメディアとミッテルという中井の 2 つの媒介概念の問題の解明へと繋がるが、その点に及ぶと本稿の論題と紙幅を越えるので、その点は機会を改めて論じたい。

謝辞及び付記

本稿は私の学位請求論文「中井正一におけるメディアとミッテルに関する一考察——中井の2つの媒介概念と資料、官庁資料、本、図書館」の第2編第3章（書き下ろし部分・未公刊）を簡明にしたものである。また本稿は図書館情報大学特別研究（B）（C）の助成を受けた。記して感謝する。さらに私の亡父の論文、後藤宏行（1965）が先駆的研究であることを縷々述べる第2編第3章を含む、私的な思いを籠めた論文を学位論文として認定下さった、学位審査の主査、九州大学大学院比較社会文化研究院の杉山あかし先生をはじめとする、諸先生方のご寛恕に深謝する。また本稿でも言及させて頂き、院生時代身近にご指導賜り、院修了後ほとんどお会いしていないにも拘わらず、学位論文全体の問題設定をその著書を通じて間接的にお導き下さり、昨年9月私が学位を得る直前、逝去した、東京大学名誉教授、稲葉三千男先生の深い学恩に感謝する。

注

- (1) 中井自身がマルクスに非常に惹かれていたと、久野収は証言している。「中井氏の立場は、…弁証法的リアリズムに転換し、発展していったのであり、そこにはリフレツツ「弁証法的美学とマルクス」（『世界文化』記載）などのふかい影響がある。しかし、中井氏のこの展開にそれよりも大きな役割を演じたのは、ヘーゲル、マルクス、レーニンの哲学思想を当時、代表した「世界文化」「美・批評」のもう一つの中心、真下信一の弁証法的美学の思想…との争点のとりあいであった」（久野 1976 172–173）。また針生一郎は、「中井正一がマルクス・レーニンの思想を咀嚼しつづけていたことは、すでにほぼ明らかだろう」と述べたうえで、次のように記す。「マルクス主義はかれが既存の哲学・美学をうけとめ、批判し、追いこすための原理的な立脚点となり、究極の目標になっている。ただかれは一般的な原理を信奉し、表明するだけで、ひとつの生きた思想が所有されるかのように錯覚する、怠惰な風潮にくみしなかったまでである」（針生 1965 365）。他方、和田洋一は自分も同人であった『世界文化』について次のように述べる。「思想的にはマルクス主義者と自由主義者が混在していた。マルクス主義者の方が数は優勢で、発言も有力であったが、しかし同人相互のあいだでそういう色分けがはっきり意識されていたわけでは

なく、反ファシズムという面で自分たちは一つであるという点がむしろ強く意識されていた」（和田 1968 41）。では「色分けがはっきり意識されていたわけではなく」いものの、「マルクス主義者と自由主義者が混在していた」『世界文化』同人のなかで、中井はどのような位置づけにあったのか。平林一は和田が研究代表となっている同じ著書で、第二次『美・批評』を、「いわば、中井正一を中心とした美学グループのモダニズムと、真下信一、新村猛らのマテリアリズムが、京大滝川事件を媒介にして合流することになったのである」（平林 1968 249）と評する。この真下のグループに久野も加わっていた。したがって久野は、中井の年少の親友であり、全集の編者であるものの、久野の中井評はある程度割り引いて考える必要がある。また同じく『世界文化』同人、武谷三男によると「中井さんを左翼的にアジっていたのが新村猛」（武谷 1968 373）であるとされる。ただ滝川事件を契機に、ファシズムに抵抗する論理の必要から中井も久野もマルクスを勉強したと武谷は証言していて（武谷 1968 374），その点が先の和田の「同人相互のあいだでそういう色分けがはっきり意識されていたわけではな」いという証言とも照合しよう。

- (2) 因みに思想の科学研究会名古屋グループで、後藤宏行の友人であった鈴木正編の中井正一著『増補 美学的空間』（新泉社、1982年）に鈴木が付けた文献一覧には載っている（鈴木 1982 394）。

参考文献

- 荒瀬豊（1978）。「読者の弁証法 『土曜日』における実験と実践」。鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』世界思想社。136–152.
- 稲葉三千男（1969→1987）。「中井正一の“媒介”論」。稲葉三千男『マスコミの総合理論』創風社。25–34.（初出は『新聞学評論』18.）.
- 今村仁司（1994）。「貨幣とは何だろうか」筑摩書房.
- 上野俊哉（1997）。「翻訳者、脱党者、漂流者——ディアスボラのなかの中井正一——」『思想』882. 205–241.
- 北田暁大（2000）。「《意味》への抗い——中井正一の映画=メディア論をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』56. 64–77.
- 木下長宏（1995）。「中井正一——新しい「美学」の試み」リブロポート.
- 久野収（1976）。「『讀書のなかの思想』三一書房.

- 後藤宏行 (1965). 「生産の論理と存在の論理」『名古屋学院大学論集』1965年4号. 271-291.
- 後藤嘉宏 (1999a). 「情報の双方向性とパッケージ資料 —— メディアの複製可能性との関わりのなかで」『マス・コミュニケーション研究』54. 141-155.
- 後藤嘉宏 (1999b). 「官庁資料と情報メディアの電子化 —— 中井正一の「媒介者」と現代 ——」『帝京社会学』12. 1-51.
- 後藤嘉宏 (2000a). 「中井正一の出版論 —— 図書館思想との関わりにおいて」『出版研究』30. 71-92.
- 後藤嘉宏 (2000b). 「中井正一におけるコミュニケーションの双方向性」『マス・コミュニケーション研究』57. 122-137.
- 後藤嘉宏 (2000c). 「中井正一の映画理論の理解のために —— 基礎射影とコプラ両概念に着目して ——」『メディア史研究』10. 55-75.
- 後藤嘉宏 (2001). 「中井正一における記憶、体系と、本、図書館」『出版研究』31. 123-144.
- 後藤嘉宏 (2003). 「社会科学分野における文献研究に関する方法的覚え書き —— 社会思想史を中心とした個人研究に焦点を当てて」『図書館情報大学研究報告』21(2). 45-67.
- 杉山光信 (1975→1983). 「言語・映画の理論と弁証法の問題 —— 中井正一論の試み ——」(初出は『東京大学新聞研究所紀要』23)『思想とその装置 1 戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社. 135-206.
- 武谷三男 (1968). 『武谷三男著作集 1』勁草書房.
- 中井正一 (1936→1981a). 「委員会の論理」(初出は『世界文化』1936年1月、2月、3月号). →中井 (1981a) に再録.
- 中井正一 (1951→1964). 『美学入門』河出書房. (市民文庫). →中井 (1964) に再録.
- 中井正一 (1964). 『中井正一全集第三巻 現代芸術の空間』美術出版社.
- 中井正一 (1965). 『中井正一全集第二巻 転換期の美学的課題』美術出版社.
- 中井正一 (1981a). 『中井正一全集第一巻 哲学と美学の接点』美術出版社.
- 中井正一 (1981b). 『中井正一全集第四巻 文化と集団の論理』美術出版社.
- 針生一郎 (1965). 「解説」. 『中井正一全集第二巻 転換期の美学的課題』美術出版社. 357-382.
- 針生一郎・松岡正剛 (1982). 「中井正一をめぐって」『美術手帖』1982年2月号. 132-143.
- 平林一 (1968). 「『美・批評』『世界文化』と『土曜日』 —— 知識人と庶民の抵抗 ——」. 同志社大学人文科学研究所(キリスト教社会問題研究会)『戦時下抵抗の研究 I』みすず書房. 239-275.
- 和田洋一 (1968). 「抵抗の問題」. 同志社大学人文科学研究所(キリスト教社会問題研究会)『戦時下抵抗の研究 I』みすず書房. 1-47.
- 鈴木正 (1982). 「中井正一文献誌」. 中井正一『増補 美学的空间』新泉社. 386-408.

(平成15年4月10日受付)

(平成15年8月28日採録)